

| Column |

ART & CULTURE around 芸劇

雲晴れて、光射す—— 太陽劇団という “大いなる気象”

この秋にプレイハウスで上演された太陽劇団『金夢島 L'ÎLE D'OR Kanemu-Jima』は、2001年の初来日以来、実に22年ぶりの公演となった。当初2021年に招聘予定だったが、コロナ禍により延期となっていた。それにしても長く来日できなかったのはなぜなのか。劇団主宰アリアーナ・ムヌーシュキンをはじめ劇団員たちが、日本への切なる愛と憧憬を持っていたのは周知のことだし、他に何度か招聘計画もあったと聞く。それでも叶わなかったのは、太陽劇団のスケールが桁外れだったからではないかと思う。

パリにある劇団拠点は、訪れた誰もが羨む「演劇の理想郷」と言われている。カルトゥーシュリ(旧弾薬庫)と呼ばれるそこには様々な国籍・民族の劇団員が集い、一丸となって芝居作りにいそしむ。ツアーとなると、ここで作られる独創的な装置や小道具・楽器・衣装の数々、さらに俳優・技術者・制作・料理担当まで含む大所帯とコンテナ数本が海を渡るわけだから、コロナ禍でなくともハードルの高い超等級の引越し公演である。

その実現には日仏双方に膨大な事前準備が求められる。現地下見から始まって、時差を超えたZoom会議、旅と輸送手配、ビザ取得、広報宣伝に協賛獲得、チケット営業、多言語が絡む字幕作りも雑物だ。通訳・翻訳を通して、異なる文化の下ではハプニングもついて回る。果たして22年間のポテンシャルは、マグマが一気に噴き出すような、演劇的ビッグバンをもたらしたかのようだった。

公演に先立つ記者会見でムヌーシュキンは「集団での創作は、小さな流れが集まって大河となるようなもの」と語った。さらに「演劇の根本は“他者”との出会いである」とも。それを受けて言うならば、幕が上がる前に、演劇は既に始まっていた。そして始まりとは



舞台稽古も進み、ムヌーシュキンの表情にも憧れの日本に“帰郷”したような安堵感が。
撮影：後藤敦司



劇団員を指導する能楽師の大島衣恵さん(中央左)。喜びと緊張の舞台稽古。
撮影：後藤敦司

単に22年前ではなく、遙か遡ったところにあったのではないかと、今にして思う。国籍や職種を超えて個と個が出会う。そこに至る道程をリレーのように走り抜けてきた各人が、劇場という一点に集い舞台を立ち上げる時、まさに虹がかかったような祝福が訪れる。それは舞台裏も表も客席も誰もが感じたことではなかったろうか。

『金夢島』は、パリの初日から上演185回をもって京都で大千秋楽を迎えた。この日、閉幕後も来場した高校生たちと歓談していたムヌーシュキン。未来に向かうその姿を見て、劇団名の意味するところがよりわかったような気がした。太陽劇団とは、時間も場所も超えて太陽がもたらす“気象”の如き存在なのかもしれない。たとえ世界を雲が覆ったとしても、光は常に射し続けているのである。

文：立石和浩(太陽劇団東京公演 プロダクションアソシエイト)

太陽劇団 Théâtre du Soleil『金夢島 L'ÎLE D'OR Kanemu-Jima』日本公演
2023年10月20日(金)～26日(木) 東京芸術劇場 プレイハウス
11月4日(土)～5日(日) ロームシアター京都 メインホール

INFORMATION

●東京芸術劇場へご来館される皆さまは、当劇場WEBサイトの「新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけ変更に伴う来館者及び公演等の主催者の皆さまへのお願い」や、館内掲示されている注意事項などをご確認ください。
www.geigeki.jp/info/covid19_notice/

●東京芸術劇場 一時休館のお知らせ
東京芸術劇場は設備更新工事を行うため、以下の期間、休館いたします。
休館期間：2024年9月30日～2025年7月中(予定)
www.geigeki.jp/info/20230403/



〈鑑賞サポート〉について

東京芸術劇場では、一部の事業で、視覚・聴覚障害者のための舞台鑑賞サポートやヒアリンググループ、各種割引、託児サービスなどの〈鑑賞サポート〉を行っております。ぜひご利用ください。

詳細 ▶ 劇場HP内「鑑賞のサポート」ページ
www.geigeki.jp/access/support.html

掲載情報に変更が生じる場合がございます。最新情報は、劇場や各主催者のHPなどをご確認ください。

次号の発行は2024年4月1日を予定しています。

東京 芸術 劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre